

杜甫の秦州詩

小南 一郎

泉屋博古館

杜甫の詩作内容が、安史の亂を境にして大きく變化したことは、誰もが認めるところであろう。それ以前の、若い

時代の江南や山東への長期の旅の餘韻を留めつつも、みやこ長安・洛陽での交遊を基礎にして成り立つた杜甫の前期詩作品には、積極的に社會とあい^{わた}渉ろうとする強い意欲を反映して、かれ独自の作品世界が作り上げられている。

その世界は、表現の洗練よりも意欲の表明が先行することが多く、當時の人々にとつて、いささか取っ付きが悪いものであつたに違いない。しかし、前期作品群は、杜甫が詩にかける抱負が正面から反映されて、かれの資質が十分に發揮されたものであつた。

それとは對照的に、四川、三峽、湖南などの地での、餘

儀なくされた一種の難民生活の中で産み出された詩については、敘景の中に抒情を結晶化させた作品に優れたものが多い一方で、その視界は、みずからの境涯を見つめることに限定されがちであつた。當時の政治や社會へ向けた關心は失われていないにしろ、^①自身の不遇への嘆きの表明が中心となり、時にいじましい、^①ような言葉をも吐いている。杜甫の後期の詩については、後世、その評價が大きく分かれるゆえんである。

こうした杜甫作品の、大きく性格が異なる、前後二つの世界の間介在しているのが、秦州における詩作品であり、その地での作品群の中に、それ以前にも、それ以後の時期にもない、独自の特質を見ることができると言える。そうした秦州詩には、言わば「非杜甫」的な要素が表明されており、杜甫の詩の評論者や研究者たちの評價は必ずしも高いとは言えないのかも知れない。ただ、わたしは、杜甫の詩作全體を考へる中で、この時期の作品が持つ重要さを過小評價してはならないと考へる。秦州において、杜甫がなにを考へ、なにを試みたのが、杜甫の前期の詩と後期の詩とを橋渡

しする鍵となつていと推測するのである。そうした杜甫の秦州詩が具える獨自性とその意味とについて、この小論に、いささかの私見を記してみたいと思う。

一 西征 烽火を問い、心折れて 此に淹留す

近年、杜甫の詩作へ佛教の影響があつただらうことが強調されており、また李白との贈答詩などの中では神仙修行への興味が示されている。しかし、杜甫の生涯を通じての基本的な立場は、士大夫階層の一員として、儒家的な價値觀でもつて、社會的な使命を果たすという生き方から離れることがなかつた。よく引用されるところであるが、「君を堯舜の上に致し、再び風俗をして淳ならしむる」③ことをみずからの使命とし、そうした堯・舜に比される主君のもとで、稷や契のような有能な臣下として働きを示したいというの④が、若き日以来の、かれの根源的な願ひなのであつた。しかし、望むような、政治的に腕を振るえる場を、杜甫は、なかなか得られず、やつと得たように見えた時にも、たちまちそれを失なつてしまふ。一旦は肅宗皇帝側近の職

を得ながらも、間もなくその朝廷を追われて、華州の司功參軍となり、その司功參軍の職務をもみずから放棄して、當時、縁邊の地と意識されていた、隴坂のかなた、秦州へと旅立つたのであつた。

安史の亂を境にして、杜甫の詩を前期と後期とに區分して論じる議論が多い。しかし、詳しく見てみれば、この亂に起因する政治的・社會的な混亂が、直接にかれの詩に變質をもたらしたのではなかつたことが知られるだらう。社會の混亂の中で、右往左往しながらも、北征の詩や三吏・三別などの、前期の杜甫の詩業を代表するような作品が生み出されているのである。安史の亂といった外的な條件ではなく、華州の司功參軍という職位をみずからの決意で放棄した、その斷念が、かれの生き方の根本にも關わるものであつて、それを境にして、杜甫の詩内容も大きく變質したと考えるべきであらう。

杜甫は、その遠祖として、西晉時期の武人であり、また春秋左氏傳の代表的な注釋を著わした學者でもある杜預を

持つことを誇りにしていた。ただ近い祖先としては、杜審言という文學者がいるにしろ、その多くが官位は地方官クラスの役人に止まっており、家業は衰えているとの慨嘆がおこることを禁じ得ない境遇にあった。杜甫自身も、士人の一人として、長安のみやこで、皇族・官僚階層に属するさまざまな人々と交友を結んではいたが、平生の抱負を實現するための政治的な地位には手がとどかなかつた。天寶年間も安史の亂に近づいた時期に、玄宗に「三大禮賦」を奏上し、その文學的な才能を認められて、京兆府の兵曹參軍の職を授かつたが、みずからを稷や契のような臣下に比する杜甫にとつては、腕の振るいようがない、名目的な官職に過ぎなかつたであろう。

皮肉なことに、そうした杜甫に素志を實現する機會をもたらしたのは、天寶十四年（七五五）の、安史の亂の勃發であつた。同年十一月に、安祿山は范陽で反旗をひるがえすと、またたく間に河北・河南の地を攻略し、翌年正月には洛陽に入って、大燕皇帝を名乗つた。そうした危機的な情勢の中で、玄宗李隆基は、長安を棄てて蜀へ奔り、天寶

十五年七月に、玄宗の第三子の肅宗李亨が、靈武において、新しい唐の皇帝として即位をする。年號も至徳と改まつた。杜甫は、安史の亂が勃發した、天寶十四年の十一月には、長安を離れ、奉先縣に居住していた家族のもとへの旅路にあつた。その冬の旅ついては、自京赴奉先縣詠懷五百字（京より奉先縣に赴く詠懷五百字）の詩に詳しい記述が見える^⑤。とりわけ、詩中の、氷塊が流れる渭河を渡河する場面の描寫は印象的である。この詩が作られたとき、まだ杜甫は、安祿山の反亂について詳しい情報が得られずにいたのであろうか、詩句の中にこの亂についての直接の言及は見えない。ただ、よく知られた「朱門に酒肉は臭るも、路に凍死の骨あり」などの句があつて、當時の社會の矛盾がすでに極點に達しているとの、杜甫の強い危機感が表明されているのである。

この戰亂の中で、家族を陝西盆地の北部周邊の地に疎開させたあと、杜甫は、至徳元年に、肅宗皇帝の行在^{あんど}へ馳せ参じようとして、潛行する途中、反亂軍に捕えられる。捕えられた杜甫は、賊軍占領下の長安に連れて行かれるが、

あまり重要人物とは見なされなかつたためであろう、長安において一定程度の行動の自由が認められていた。その虜囚の期間中に、春望^⑥などの詩が遺されており、たとえば「國破れて山河あり、城春にして草木深し」と歌うとき、杜甫自身が、國すなわち首都、城すなわち長安城の内部にあって、そこを視點として、賊軍の支配下にある都市とそこでの季節の巡りとが描寫されていることを忘れてはならないであらう。

杜甫は、反亂軍に囚われたまま至徳二年を迎えたが、その四月、長安城を脱出し、鳳翔にあつた肅宗の行在に駆けつけることに成功する。そうした果敢な行動が評價をされて、左拾遺という皇帝側近の官を授けられた。主君に對してみずからの意見を表明することが可能な、杜甫が長年望んできたような官職を得たのである。ところが官職を得て一ヶ月も経たない、同年の五月には、宰相であつた房琯を辯護する上疏をして、肅宗の怒りを買う。杜甫は、三司で尋問を受けることになつたが、宰相の張鎰のとりなしで、なんとか事なきを得た。しかし、この事件を通じて、かれ

には、朝廷内にその居場所がなくなつてしまふ。同年の閏八月には、鄜州にいる家族を見舞いに歸るといふ名目で朝廷を離れることになり、政治の中核から遠ざけられてしまつたのである。

至徳二載の十月、肅宗は、賊軍を追い出して、長安に歸還する。杜甫も、鄜州から、家族をつれて、長安にもどり、中央政府の一員として朝廷に出仕することになつた。彼の詩は、一方で初めて經驗する、皇帝近邊にあつて眼にした宮廷儀禮などを描寫しており、「天顏 喜びありて近臣知る」(紫宸殿退朝口號^⑦)などと皇帝側近としての立場をいささか誇らしげに述べたりはするが、他方、朝會が終わつたあとには、毎日のように、長安城東南隅の曲江池を訪れ、酒を飲んでゐた。曲江池畔における、いささか自棄的な氣分を表明した詩がいくつも遺されているのである。曲江二首の其二の詩は、次のように歌う。^⑧

朝回日典春衣

朝廷からの歸りみち、日ごとに春

の衣を質入れし

毎日江頭盡醉歸

毎日、曲江池のほとりで、酔いを

盡くしてから、家にもどる

酒債尋常行處有

酒代の借金は行く先々でたまって

はいるが「かまうものか」

人生七十古來稀

七十まで生きられる者など、古來

ほとんどのないのだ

穿花蛺蝶深深見

花々の間を飛ぶ蝶々がいく重にも

重なりあつて眼に入り

點水蜻蜓款款飛

水に尻尾をちよんちよんと着けつ

つ蜻蛉はゆるやかに飛ぶ

傳語風光共流轉

風光を彩るものたちよ、あなたた

ちと一緒に流轉してゆこう

暫時相賞莫相違

しばしの間とはいえ、互いを尊重

しあい、同じ心でいたいものだ

この詩の背後にあるなげやりな心情は、朝廷に居どころを失つたという喪失感に由来するものであつたに違いない。人間世界で孤獨な杜甫が、自然の風物の中に、しばしの友

杜甫の秦州詩（小南）

を求めているのである。

結局、乾元元年（七五八）の六月になり、房琯をはじめ、劉秩、嚴武など、房琯の一味と目される人々が、そろつて地方官に出される。杜甫も、同じ時期に華州の司功參軍に出されることとなつた。その華州參軍の職務についてのち、ほどなくして、飢饉が深刻で、食料が得られないという理由を付けて、杜甫はその職務を放棄してしまふ。官職に在ることを通して自己の理想とするところを實現しようと望んできた杜甫は、その平生の願いを可能にするための道を、みずから閉ざしてしまつたのである。

華州を離れた杜甫は、家族を連れて秦州にむかう。秦州での詩作を代表する、秦州雜詩の第一首は、次のような句で結ばれている。「西方への旅では、戦亂を知らせる烽火が上がっているかどうか、いつも気がかり。わが心は折れて、この秦州の地に留まることとなつた」^⑨。この「心折れて」の句は、単に、これ以上旅を續ける元氣がなくなつてという意味に讀むだけでは不十分であろう。官職にあることを斷念し、心の心棒が失われたような氣持で、この邊

境の地に自分はある、と言うのである。

それ以後、杜甫は、秦州から、さらに蜀、江南へと放浪の生活を送ることになる。そうした放浪の旅の原因について、華州で退職を決意したあとに作つたであろう、立秋後題（立秋の後に題す）の詩には、

罷官亦由人 官職を辞めたのも人との關係ゆえ

何事拘形役 生活のために自由を拘束されるのなど

まっぴらだ

という。あるいは、秦州雜詩第一首の冒頭にも、

滿目悲生事 眼にするのは人の世の悲しいできごと

ばかり

因人作遠遊 人との關係ゆえに遠い旅に出ることに

なつた

と述べている。この「由人」と「因人」とは、おそらく同

じ方向のことを言っているのである。官を罷めたのも、遠い旅に出たのも、みな「人」との關係に原因があるとするのである。その「人」とは、房琯のことだとする注釋もあるが、おそらくは特定の個人を言うのではなく、房琯辯護事件以來、様々な場で示された、杜甫に敵對的な人々との關係を廣く指すものであつただろう。もしこの「由人」という用語が、西周時代末期の混亂した世相を歌つた、詩經、小雅の十月之交篇の

下民之孽 匪降自天 人々の災いは、天から降つて

來るのではない

噂沓背憎 職競由人 陰口や陰險な惡意など、すべ

て人が引き起こすことなのだ

という表現を強く意識していたとするならば、杜甫を憎み、陰口をいう人々が、結局、杜甫を、その官職から追い出すことになつたと言っていることにならう。

杜甫が辯護をしようとした房琯は、安史の亂の中で、長安のみやこを逃げ出した玄宗皇帝を追って、成都への避難行に同伴をした。天寶十五年の八月に、房琯は、玄宗の使者として、肅宗を冊立するために靈武に赴き、そのまま肅宗のもとに留まることになった。肅宗も、房琯が高い名聲を持つことから、一旦は重く用い、宰相に任じた。しかし、房琯は、大言壯語はするが實力が伴わず、賊軍の討伐に向かつては、陳陶斜で大敗を喫するなどして、肅宗の信頼は失われてしまう。そうした房琯について、杜甫は辯護の上疏をする。その辯護に對して、肅宗は激怒をし、杜甫を遠ざけたのであった。

杜甫自身、房琯について、その性は「簡に失す」と述べている（新唐書杜甫傳）。この簡という言葉は、南北朝時期には、人物を高く價值する際に用いられる語彙であった。さればこそ、簡文帝などと、皇帝の呼び名ともなっているのである。簡とは、小事に拘泥することなく、事態を大きな観点から見ることができるとを評價している言葉であった。實務を濁とし、それに關わらないことを清とする、

杜甫の秦州詩（小南）

清濁の價值基準とも共通するところがあつて、魏晉南北朝の貴族・門閥たちが主導する社會氣風の中で、簡なる人物は高い評價を得て來たのである。

確かに史傳に見える房琯の言語行動を見ても、簡と稱すべきところが少なくない。賓客を好み、天下は自分が擔うのだと壯語するが、そうした彼のもとには、問題のある人物たちが近付いて、しばしば物議をかもしている。房琯の追い落としを企てる賀蘭進明は、かれのそうした點を取り上げ、肅宗に次のように告げている。

西晉王朝は、虚名を重んじて、王夷甫（王衍）を宰相に任じ、浮華を尊んで、それに習い、その結果、亡國に至りました。現在、陛下は社稷の復興に當たつておられ、實才のある者をこそ用いられるべき時でありますのに、房琯の本性は大雜把で、いたずらに大言壯語をなすのみです。宰相の器ではございません。

賀蘭進明が言うように、時代は「實才」、すなわち實際の場で直接に役立つ人材を求めていた。新唐書の房琯傳には、肅宗が財利に通じた第五琦を重く用いようとしたとき、

房瑄はそれに反對する。しかし肅宗から、それなら六軍を維持するための財はどこから集めて来るのかと反論されて、房瑄は答えることができなかったというエピソードを載せている。財政に通じた、實務官僚たちが政治の場で重用されるようになりつつあった。逆に、大言壯語をし、太っ腹で、清濁あわせ飲む、簡なる性格の房瑄のような人物が活躍する時代ではなくなっていたのである。

それは、單にこの時期が安史の亂による破壊からの復興期であるがゆえに、實際の行政の場で役立つ實務的な人物が求められたというに止まらなかつた。社會の根本的な構造が變化をし、政治の場で六朝的な人物が求められなくなっていたのだと考えるべきであろう。房瑄一派が朝廷から退けられた原因について、先帝の玄宗に近い臣下と肅宗派の官僚との間の抗争があつたのだとする説明もある。表面的にはそうした對立があつたかも知れないが、その根本的な原因は、政治體制の根本的な變化にあつただろうと考えられるのである。内藤湖南教授以來、中國の封建社會は唐代と宋代との間に大きくその性格を變えたと論じられて

來たのであるが、その唐宋の變が、すでに肅宗の政權の中でも具體的な形を取りつつあつた、その一つの表われをここに見ることができよう。

舊唐書房瑄傳は、肅宗が出した、房瑄を罷免する詔を長々と引用しており、その最後は、次のように締めくくられている。¹⁹⁾

わたしは、天下の統治にあたることになって以來、多くの有能な士を招き寄せ、いつも立派な人格者を求めて、彼らとともに天下泰平を招き寄せたいと願う一方で、徒黨を組んで、實質のない評判で人々にもてはやされている人々を深く憎んで來た。今、ここに彼らを譴責するのは、確かにしかるべき罪があつたからなのであるが、それでも、房瑄一派が妄りに自己宣傳をし、根も葉もない評判を集めたりするのではないかと考える。朝廷の人々にはよく解っているだろうが、在野の者たちが疑問を懷いたりしやすいことを心配し、それゆえに、事態を詳しく述べて、人々に正確な知識を持つてほしいと願つたのだ。すべての官吏たちよ、

わたしが旨とするところを悉知してほしい。

この詔は、單に房瑄個人の資質を問題にしただけに止まらず、廣く言えは、六朝的な政治に決別し、新しい政治のやり方を求めるという宣言であったと讀むことができるのである。著名人たちがグループを作り、世論を喚起しつつ政治を動かしてゆく六朝的な政治體制が否定されて、有能な官僚たちが天子の命を受け、その手足となつて統治を行なう、中國近世の君主獨裁制につながる政治體制が模索されていたのであつた。

杜甫は、この房瑄と布衣の交わりがあつたとされる。しかし、かれが房瑄に肩入れしたのは、單に古くからの縁故があつたからというに止まらないだろう。房瑄的な政治への關わり方に、杜甫も共感するところが多かつたからだと考えられるのである。房瑄の死後、杜甫はその墓に參り、また、かつて交遊があつた人々の死を嘆いた八哀詩にも、房瑄派の人々がいく人か收められている。杜甫自身も、かれの詩に見えるように、天下をみずから擔うような大言壯語をなす（杜甫の社會詩は、そうした自負に支えられていた）

杜甫の秦州詩（小南）

が、しかし實務的な能力は、あまりなかった。華州での職務を歌つた、早秋苦熱推案相仍（早秋、熱と推案の相い仍るに苦しむ）の詩の二聯、三聯には、次のようにある。

每愁中夜自足歎

夜中にサソリがたくさん出ること
を常々憂えて來たが

況乃秋後轉多蠅

ましてや秋になつても、かえつて
青蠅が増えていなのだ

東帶發強欲大叫

正装して職務に勤めようとすれば
大聲で叫び出したくなる

簿書何急來相仍

書類は、なんで、せわしなく續々と
やつて來るのか

この詩は、華州で官職の放棄を決意する直前の心境を反映したものとして重視すべきであろう。詩中に見えるサソリや蠅は、詩經の青蠅詩を引くまでもなく、中央から貶官されてやつて來た杜甫に對して示された、華州の役所の人々の惡意や陰口を意味するに違いない。そうした役所の

中であつて、正装をして職務に勉勵し、能率的に書類を處理してゆくといった、普通の官吏たちが毎日行なつてゐることが、杜甫にはできない。かれが、時代が求めているような、有能な實務官僚でなかつたことは確かであろう。

杜甫は、華州において、官吏としての職務を放棄し、家族を連れて遠い旅に出る。かれが職務を放棄したのは、社會全體が大きく變化をし、杜甫のような人物が官吏として活躍できるような時代ではなくなつてゐたことに、その根本的な原因があつたと考へるべきであろう。杜甫は、四川や江南の地にあつて、北方へ歸る人々を送別し、しばしば自分も北方へ歸りたいとの願いを述べてゐる。しかし、北方の政治社會には、すでに、かれが身を置くことのできるような場所がなくなつてゐた。杜甫の旅は、歸るあてのない、永遠の放浪とならざるを得なかつたのである。

二 識り易し浮世の理 一物を教^して違^はわしめ難^くす

秦州雜詩二十首を中心とする、杜甫の秦州における作詩活動の背後には、大きな不安感があつたことは確かである

う。この時期に作られた、夢李白（李白を夢む）の詩は、^⑮

死別已吞聲

死別に對して、聲を失うほどの悲しみを

味わつてきたが

生別常惻惻

生き別れの悲しみも、惻惻と胸に迫つ

て忘れることができない

という一聯で始まり、李白の魂が夢で杜甫のもとを訪れたことが歌われる。もしかすれば李白はすでに死んでゐるのではないか、「恐るらくは平生の魂にあらざらん」と、杜甫は疑う。その魂が歸つて行つたあとの、

落月滿屋梁

落ち行く月の光が屋根のてつぺんを

いっぱい照らしている

猶疑照顔色

あたかもあなたの顔を照らしているか

のようだ

といった描寫もまた、深い不安感が形象化したものであつ

ただろう。この落月が屋梁を照らすという描寫が、沈約の悼亡詩^⑩の

去秋三五月 去年の仲秋と同じ満月が

今秋還照梁 今年の秋もまた家の屋根を照らしてい

る

という表現を承けたものであるとすれば、この詩には、李白への悼亡の意が込められていたことになる。月光の中に浮かび上がる李白の顔はほとんど死に顔であって、その不安は死と強く結びついたものであったことが知られるのである。

あるいは、同じ時期に作られた初月の詩は、

光細弦欲上 光は細く、弦が上向こうとしてはいる

が

影斜輪未安 斜めに懸った影の、まるい輪郭はまだ

安定していない

杜甫の秦州詩（小南）

微升古塞外

古い砦のかなたに少しだけ姿を見せて

已隱暮雲端

すぐ夕べの雲の端に隠れてしまう

河漢不改色

そうした微弱な月の光に、銀河はもと

のままのたたずまい

關山空自寒

國境の山々はがらんとして、寒さの底

に沈んでいる

庭前有白露

庭には白い露が降りて

暗滿菊花團

闇の中で菊の花いっぱい丸い珠を付

けている

この詩に歌われている初月を、何か（唐王朝の君主権の不確かさなど）の象徴と理解しようとする注釋もある。深いところでは、そうした比喩とも通じ合っていたのであろう。しかし、この詩の形成の直接の動機は、杜甫の心中に藏されていた、全ての存在が不安定で不確かだという感慨にあり、それと通じるところのある現実の景物を切り取って、この詩作品に結晶化させたものなのであった。

このように、杜甫の秦州詩は不安感と不安定感との基礎

の上になり立っているのであるが、そうした不安定感には、單に時代が混亂しており、みずからが邊境の地にあるという外的條件だけに由來するのではなかつただろう。その不安定感の根源は、かれがかねてより懷いて來た、政治の場にあつて理想實現のために邁進したいという願いを斷念して、みずからの生き方の根本を見失つてしまつたことにあつたと推測されるのである。

秦州詩は、そうした根本的な不安定感の上に形成されている。しかし一方で、その中に安定したものが歌われていないわけではない。とりわけ特徴的なのは、秦州の地に住む異民族たちの描寫である。秦州雜詩の第三首の後半には、次のように歌われる。

降慮兼千帳 降伏した異民族の者たちの千をも超え

る數のテント

居人有萬家 そこに住むのは一萬もの家族たち

馬驕珠汗落 馬たちは元氣いっぱい珠の汗を滴ら

せ

胡舞白題斜 西域風の踊りに、踊り手たちの傾けた

額が白く光る

年少臨洮子 臨洮出身の若者は

西來亦自誇 西からやつて來たことが、むしろ誇ら

しげだ

杜甫の悲痛とはまつたく別な、異民族の人々のたくましい生き方の描寫が、その詩の中に取りこまれてゐる。若者が西方出身であることを誇らしげにしていることに象徴的に示されるように、杜甫がそれまでなじんできた、中原文化中心主義の價値觀とは異なるものが、人々の生活を支えていたのである。あるいはまた、寓目の詩^⑧には、次のようにある。

一縣葡萄熟 縣全體にブドウが熟する季節

秋山首藉多 秋の山にはクローバーの原が廣がる

關雲常帶雨 關所あたりの雲はいつも雨もよい

塞水不成河 砦の側の流れは尻無川^{しんむがわ}となつて終わる

羌女輕烽燧

チベット族の女たちは、狼煙のろしが上がっても少しも動じない

胡兒制駱駝

異民族の若者たちが駱駝を引きまわしている

自傷遲暮眼

悲しいことに、人生の暮れ方にある私の眼は

喪亂飽經過

人の世の喪亂を見過ぎてしまった

杜甫が、老境の近づく中で、世の中の喪亂を見過ぎてしま

まったと嘆いている傍らにあって、異民族の人々が、社會的な混亂にはめげない生活を送っている。そうした人々のたくましさが、首聯の、西方から傳來したブドウやクローバーが繁茂していることの描寫とつながっているのである。杜甫は確かに悲しんでいる。しかし、かれが作る詩全體を悲しみに染め上げることはしない。それは、一種の精神的な強さだとも言えるであろう。そうした姿勢を取ることができたのは、杜甫が、この時期に新しい世界觀を胚胎したことが背景にあり、そうした新たな視點が、この秦州とい

杜甫の秦州詩（小南）

う土地ですでに成長しつつあったことを示していると、わたしは考える。

異民族の人々の生活を並んで、もう一つ確實なものは、自然であった。秦州詩には、もちろん邊境の地の特異で、不安感につながるような自然もしばしば歌われている。秦州雜詩の第四首は、よく知られた作品である。

鼓角緣邊郡

國境近くの郡役所で鳴らされる太鼓と角笛の聲

川原欲夜時

時刻は、石だらけの河原に日が陰るころ

秋聽殷地發

その聲は、秋の季節の中で、大地を振るわせて發せられる

風散入雲悲

風にちぎれ、雲に入っ、悲しげである

抱葉寒蟬靜

木の葉にしがみついた秋の蟬はひたすらに靜かに

歸山獨鳥遲

山へ歸ってゆく一人ぼっちの鳥の遅遅

たる飛翔

萬方聲一概

どこの地方でも、聞こえるのは「警戒

のための」太鼓と角笛の聲ばかり

吾道竟何之

そうした中で、私の道は結局、どこへ

行くことになるのだろうか

こうした詩においては、杜甫の感情と周囲の風景とが一

體のものとなっており、たとえば第三聯に描かれる寒蟬と

獨鳥とは、危うく、たよりなげな存在であり、そうしたも

のへの注視は、みずからの境涯への思いと無關係ではな

かったに違いない。しかし一方で、確實な自然も描寫され

ている。秦州雜詩の第十二首には、次のようにある。

山頭南郭寺

山の頂上に建つのは南郭寺

水號北流泉

川は北流泉と呼ばれている

老樹空庭得

人氣ひとけない寺の庭には年を経た樹木がと

ころを得て根を張り

清渠一邑傳

清らかな水の流れる導水路が邑まち全體に

張り巡らされている

秋花危石底

高くそびえる岩の下には可憐な秋の花

が咲き

晚景臥鍾邊

地面に落ちた釣鐘の側に夕陽の光が射

し込む

俛仰悲身世

來し方、行く末を思って、わが境遇と

運命とを悲しむとき

溪風爲颯然

谷を渡る風は、わたしのために、悲し

げな音をたてる

この詩では、後半二聯の描寫が杜甫の身世と一體のものであるのに對して、前半の二聯は、そうしたものから獨立している。とりわけ「老樹空庭得」の句には、釣鐘も地面に落ちて、廢墟となった寺の庭に、そうしたことも知らぬげに、年老いた樹木がしっかりと根付いていること、そうした樹木を自分が發見したことが、肯定的に表現されているのである。

秦州という縁邊の地で、みずからの身世を悲しむ杜甫が

いる。しかし、その周囲には、かれの悲しみとは無關係に、おのがじし生きる異民族の人々がおり、しつかり根付いた自然が存在していた。自分自身を座標軸の中心に据えて、その周囲に他人や自然を配するのではなく、自分と同等の價值をもつものが、自分とは獨立して存在すると認識し、そうした存在に深い關心を注ぐようになったことが、杜甫の詩に新しい展開をもたらしたのだと考えられるのである。秦州において、いつか再會をし、ともに「文を論じた」と願っている友人の詩人たち、高適こうしきと岑參しんじんとに送った長詩（寄彭州高三十五使君適虢州岑二十七長史參三十韻）は、次のような句から始まっている。^⑩

故人何寂寞 友人たちからは、なにの便りもない
今我獨淒涼 今、わたしは一人ぼっちで、寒々とし

た心境にある

老去才雖盡 老いがおとずれて、詩才は盡きてしま
まったが

秋來興甚長 秋が来れば、季節に寄せる思いが大き

杜甫の秦州詩（小南）

く成長する

物情尤可見 萬物のあり方（物情）こそは眼を注ぐ

べきもの

詞客未能忘 そうしたものは、詩人わかしに忘れがたい印

象を遺す

引き續き、高適、岑參と杜甫自身との文學について述べるが、その中から印象的な表現を抜粋してみれば、次のような句を擧げることができるだろう。

意愜關飛動

心にかなうのは、自由に生きる鳥や獸
たちに關わることも

篇終接混茫

作品の結末は、そのまま世界の果ての
混沌にまでつながっている

∴ ∴

心微傍魚鳥

氣持ちが落ち込んだとき、魚や鳥に心
を寄り添わせ

肉瘦怯豺狼

肉體が衰えて、猛獸たちにおびえる

この詩は、親しい詩人たちに送った近況報告であり、杜甫は、自身の現在の文學創作のあり方を、かれらに語るうとしてゐる。詩才が盡きたと感じられる中であつて、創作意欲をかきたてるのは「物情」であり、具體的には飛動するものたちだといふのである。魚や鳥たちは、おのがじし飛動している。そうした存在に自分の心を寄り添わせる中から詩は生まれるのだといふ、秦州の地で得た新しい認識を、詩を作る友人たちに伝えようとしてゐるのである。

とりわけ杜甫の後期の詩には、自然物が、それぞれにその生命力を享受している様子を描いた詩句に優れたものが多い。杜甫の草堂の近邊、あるいは旅ゆく船の周圍には、それぞれに元氣いっばいに生きてゐる動植物がよりそつてゐる。その旅の途上、夔州で作られた秋野五首の第二首には、次のように歌う。

易識浮生理

根なし草のこの世界、それを支配する道理は容易に知られる

難教一物違

全ての存在がその在り様から背かぬよ

うに取り計らつてゐるのだ

水深魚極樂

水は深く、魚たちは存分に楽しみ

林茂鳥知歸

林は茂つて、鳥たちは歸るべき場所を心得てゐる

吾老甘貧病

わたしは年老い、貧乏で病氣がちだが、

そうした境遇を甘受したい

榮華有是非

榮華にはいろいろと風評がともなつて

「そんなものはまっぴらだ」

秋風吹几杖

秋風が、身を支える几と杖とを吹きぬ

けてゆく

不厭此山薇

この山に隠棲してしまふことに、なに

の心残りもない

杜甫は大膽にも、この世界の根本道理は容易に知られる、
と云う。その道理とは、すべての存在が、その本來の生き

方から乖離せぬように方向付けるものだといふのである。

吉川幸次郎教授は、この一物の語を、主として人間世界のものを指すとし、浮生の理についても、人間世界の道理と

理解しようとしておられる。²¹しかしわたしは、ここで言う物とは、動植物を含めたすべての存在物を言うのであり、こうした發言をするとき、杜甫は、元來の、人間中心主義的な觀念を越えていたと考えたいのである。

こうした、人間中心主義を超越しようとする觀念は、あるいは、佛教の輪廻思想と關わるものであっただろうか。

輪廻思想は、人間と動物（畜生）との隔たりが絶対的なものでないことを教える。とりわけ、目の前にいる動物が、死んだ肉親の轉生した姿である可能性があると考えるのは、當時の中國の人々に大きな衝撃を與えた。六朝時期以來の佛教説話集には、家畜に轉生していた肉親を、それと知らぬままに、殺して食べてしまったという物語りがいくつも收められており、殺生戒の宣傳と結び付けて、こうした物語りが廣く語られ、人々の精神に大きな影響を及ぼしていただろうことが知られる。

杜甫の家族のうち、おそらくは奥さんは、佛教信者であった。のちに、夔州あたりで作られたであろう、縛鶏行（縛られたニワトリの歌）には、次のようにある。²²

杜甫の秦州詩（小南）

小奴縛鶏向市賣

召使いがニワトリを縛り、市場で賣ろうとしている

鶏被縛急相喧爭

きつく縛られたニワトリは抗議の叫び聲を上げる

家中厭鶏食蟲蟻

家の者はニワトリが蟲や蟻を食べることを嫌っているのだが

不知鶏賣還遭烹

賣られたニワトリも料理されてしまふことが分かっていない

蟲鷄於人何厚薄

蟲もニワトリも人間にとつては同等にあつかうべきもの

吾叱奴人解其縛

召使いを叱って、ニワトリを解放させた

鷄蟲得失無了時

ニワトリと蟲との矛盾關係は、解決のつけようがないもの

注目寒江倚山閣

わたしは、冬の長江に目を注ぎつつ、山閣に立ち盡くす

ニワトリが庭の蟲たちを食べるから賣ってしまいましたよ

うと言つた家人とは、杜甫夫人であつて、そうした提案をしたのは、殺生を戒める佛教信仰にもとづくものであつたと想像されるのである。杜甫自身は、市場で賣つたニワトリが殺されることになれば、殺生を避けたことにはならぬではないかと苦笑をしている。

ニワトリと蟲との間の矛盾關係が根本的な解決のつかぬものであるとの感慨から發して、かれの思考は、この世界に、同様に解決のつかない關係が無數に存在していることにまで思い至る。我々を取りまいてゐるのは、善惡二元論では解決のつかない、存在そのものの具える矛盾なのである。單純化して言えば、前期の杜甫の思考は單一座標軸上の二元論で成り立つていた。しかし、その後期に至つて、杜甫は、萬物の存在が矛盾關係の上に築かれており、解決の付け難いものであることを、様々な經驗を通して體感した。ここでも蟻とニワトリとの矛盾關係に發して、そうした重い問題に思い至つた杜甫は、凝然と立ち盡くし、冬の長江の流れに目を注ぐばかりなのである。

このように、杜甫の家庭内の佛教信仰は、知らず知らず

の内に、杜甫の思考にも大きな影響を及ぼしてゐた。萬物が矛盾關係にあるという深刻な認識のほか、人間中心主義から脱却し、萬物の生命の流れの中に自分自身の生命をも託し、そうした中で詩作を行うのだという、新しい視點が形作られるに際しても、家人たちの、日常生活に密着した佛教信仰からの影響があつたと想定できるのではなからうか。杜甫が交渉をもつた僧侶たちとの關係から、その信仰が北宗禪であつたか南宗禪であつたかなどと論じるよりも、日常生活に密着した佛教信仰の方が、詩人としての杜甫の視點の熟成に、より大きな影響を及ぼしてゐたという可能性を考えてみる必要があるだろう。

秦州時期に基礎が築かれた杜甫の新しい視點を、もう少し廣い視點から位置づけてみるならば、秦州以後の杜甫は、人間中心主義と人間中心主義の超越との間で揺れてゐたと言へるのかも知れない。かれの人間中心主義の認識は、その前期から引き繼がれて來たものであり、それは政治の場への復歸の願ひとも強く結びついてゐた。そうした認識の根本は儒家的な立場にあり、政治的な手段を通して、人間

世界に安定をもたらそうとの願いと一體のものなのであった。それとは對照的な、自分も自然の中の一物だとする認識は、政治的な挫折の中で育まれたものであり、政治に關わることを斷念し、萬物の生命の流れの中に、みずから委ねようとするものであった（そうした姿勢のきざしは、前に舉げた曲江詩にも、すでに見えていた）。

前引の秋野詩の最後もそうであるが、杜甫の詩には隱逸への心の傾斜を述べたものが少なくない。ただ、その隱逸は、高士傳や隱逸傳などが描くような、社會の通念を否定した、いわば反抗的な隱者生活を意圖するものではなかったことに注意すべきであろう。杜甫にとつての隱逸とは、政治の場への思いを斷ち、一人の生活者として、自然物たちの存在と調和を保ちつつ、自分自身の生命を遂げることにあつた。秦州にあつても、そうした隱逸の場を探し求めていたことが、いくつもの詩の主題や内容を通してうかがわれる。しかし、杜甫には隱逸へ向かう最終的な決心が着かなかつた。發秦州（秦州を發す）の詩の後半に、²³⁾

杜甫の秦州詩（小南）

此邦俯要衝

この秦州は要衝につながる土地

實恐人事稠

厭なことに、人間世界のわずらわしさがいっぱいある

應接非本性

人と付き合うのはわたしの性格にあわない

登臨未銷憂

高くに登つて美しい景色を眺めても、憂いは消せない

∴ ∴

大哉乾坤内

この大きな宇宙の中にあつて

吾道長悠悠

わたしが行く道は、永遠に、あてどのないものなのだ

と云い、「樂土」を求めて、秦州の南方に位置する、同谷縣へと移住をする。しかし、その同谷にも一ヶ月も留まらなかつた。發同谷縣（同谷縣を發す）の詩の最後に云う、²⁴⁾

平生嬾拙意

生來、怠け者で世渡りの下手な自分が

偶值棲遁迹

たまたま隱棲の場所に巡り合つたので

あるが

去住與願違 願いのようにそこに留まることができ

ず

仰慙林間翮 木々の間を自由に翔ける鳥たちをふり

仰いで、恥ずかしく思う

ここでは、願っていた隱棲の場所から、自分はやむを得ず離れることになったと歌われている。しかし、秦州や同谷の地に安住できなかった本當の理由は、杜甫自身が、政治的な場への復歸の思いから完全には脱却できなかったことであつたと推測されるのである。

秦州・同谷を離れた杜甫は、劍門の難所を越えて、蜀へと向かう。その後も、かれの心は、政治と隱逸、人間中心主義とその超越との間を揺れ動き、終わりのない放浪を續けたのであつた。杜甫の後期の詩は、前期作品のように、信念をもつて一直線に邁進する精神の上に作られたものはなかつた。ものごとは善惡二分論では割り切れるものではないとする、精神の揺らぎの中にあつて、その揺らぐ精

神の一瞬のきらめきが、背後に深い迷いがあるゆえに、重い表現となつて定着され、後期獨特の作品世界を形成しているのである。

註

- ① 馮至『杜甫傳』人民文學出版社、一九八〇年、は、杜甫の社會的な關心を視點に据えて、その生涯を記述している。
- ② たとえば、郭沫若『李白與杜甫』人民文學出版社、一九七一年。ちなみに、郭沫若が、杜甫と南宗禪との關わりを強調したのに對して、陳允吉「略辨杜甫的禪學信仰——讀《李白與杜甫》的一點質疑」（唐音佛教辨思錄、上海古籍出版社、一九八八年）は、むしろ北宗禪と密接な關係があつたとしている。
- ③ 奉贈韋左丈二十二韻・致君堯舜上、再使風俗淳（王洙本社工部集卷一。以下、杜甫の詩のテキストの引用は王洙本に依り、草堂詩箋などで校訂を加えた）。
- ④ 陳貽焮『杜甫評傳』上冊、上海古籍出版社、一九八二年、の第一章を參照。陳教授の評傳は、記述が詳細であると同時に、その議論は中庸を得ている。小論でも、杜甫の經歷や作品の年代づけについて、この書物を參照したところが多い。
- ⑤ 自京赴奉先縣詠懷五百字（王洙本卷一）
- ⑥ 春望（王洙本卷九）

- ⑦ 紫宸殿退朝口號（王洙本卷十）
- ⑧ 曲江（王洙本卷十）
- ⑨ 秦州雜詩・西征問烽火、心折此淹留（王洙本卷十）
- ⑩ 立秋後題（王洙本卷二）
- ⑪ 舊唐書卷一百一十
晉朝以好尚虛名、任王夷甫爲宰相、祖習浮華、故至於敗、
今陛下方興復社稷、當任用實才、瑄性疎闊、徒大言耳、
非宰相器也
- ⑫ 舊唐書卷一百一十
朕自臨御寰區、薦延多士、常思聿求賢哲、共致雍熙、深
嫉比周之徒、虛僞成俗、今茲所譴、實屬其辜、猶以瑄等
妄自標持、假延浮稱、雖周行具悉、恐流俗多疑、所以事
必縷言、蓋欲人知不濫、凡百卿士、宜悉朕懷
- ⑬ 八哀詩并序（王洙本卷七）
- ⑭ 早秋苦熱堆案相仍（王洙本卷二）
- ⑮ 夢李白（王洙本卷三）
- ⑯ ちなみに、陳慶元『沈約集校箋』浙江古籍出版社、一九九
五年、は、第二句の照梁の語を照房に改めている。月が梁を
照らすという表現に託されたイメージと意味とは、確かに解
りにくい。やはり照梁という表現のまま、その意を追及す
べきであろう。あるいは、屋梁が招魂儀禮の場であったこと
と関連するのであろうか。
- ⑰ 初月（王洙本卷十）
- ⑱ 寓目（王洙本卷十）
- ⑲ 寄彭州高三十五使適虢州客二十七長史參三十韻（王洙本卷
十）
- ⑳ 秋野（王洙本卷十五）
- ㉑ 吉川幸次郎「識り易し浮世の理」筑摩書房全集第十二卷
- ㉒ 縛鷄行（王洙本卷七）
- ㉓ 發秦州（王洙本卷三）
- ㉔ 發同谷縣（王洙本卷三）